

演出の記録「ねこのこね」2020 県大会より

2025年8月30日 久保山ワタル

演劇の面白さは「演出を発見すること」にある。

・写真を撮る

劇中・映画中で集合写真を撮るのは別れのフラグ。もちろん脚本に書いてあるので、演出ではない。

高校演劇も、この人物たちがそろって同じ劇をする機会はない一期一会。お客さんに登場人物たちに親しみを持たせる役割もあるように思う。



・首輪をつける

猫に首輪をつけることはあるが、人間に首輪をつけることはめったにないので印象に残る。監禁、拘束を連想させる。劇の中ではちゃぶ台が様々な役割を示すが、ここではノリオがちゃぶ台に乗ることで、首輪をする方とされる方の両方の顔が見れるように演出している。



・平台を組み合わせた抽象的なセット

上手奥がノリオの部屋。下手の一番高いところが玄関になっている。方向性をしっかりとることで、家のように見える。

ケコミは、手前が一番濃い茶、後ろに行けば行くほど薄い茶色にしており、奥行きを感じさせる。

・場転 道路

黒子が脚立を下手に置いて、ちゃぶ台を上手に移動させる。黒子が置き終わったタイミングで、先生上手から現れる。部屋の中のセットはほぼそのまま、道路のシーンとなる。



・脚立に隠れる

脚立に隠れることで、登場人物が完全に隠れないまま、ノリオの言動に退いていることがよくわかる。脚立がシースルーな特徴をうまく生かす。この後、紀子もラーメン屋から逃れるため、脚立の後ろに隠れる。脚立は電柱となり、ノリオと犬山(ラーメン屋)が蝉の鳴きまねをする装置として使われ、その後ノリオが幸せな家庭を覗き見るためにもつかわれる。



・ゴミ箱を置く

退場した犬山が、汚いゴミバケツを持ってきて、舞台のセンターの高いところに置く。ラーメン屋の格好なのでごく自然。このバケツが次の重要な小道具になる。



・猫になる

猫になった夫が出てくる。先生が首根っこをつかむと、猫っぽく手足を動かしたりして騒ぐ。この

シーンは下手奥の高いところに二人、それをノリオが上手の低いところでじっと見ていてミザンスが良い。まるで高校生のノリオが、大人の現実を見ているような感じがする。



・紀子と夫猫の出会い

おなかがすいた紀子が赤い服を着てセンターで寝ている。そこへ夫猫が下手の一番高いところから登場する。小道具たちのミザンスがよい。



・人間レッスン

紀子が後ろ脚だけで立つが、猫なので人間のように立ってない。それを動作で表現する。創造的なシーンが作れた。紀子の悲鳴が印象的。

・残飯のトレイを弾き飛ばす

残飯を食べるように、粘り強く説得する夫猫に対して、紀子はあくまで拒否。トレイを勢いよく音を立てて飛ばすことで、観客の目を覚ます効果があった。



・猫のワルツ

ラーメン屋につかまって、マタタビをかがされた夫猫が倒れた後、ピンクの照明がついて、音楽が鳴り、二人がワルツを踊る。劇中の休憩シーン。



・袖は使わない

犬山が下手側で背中を見せて立ち、オブジェとなる。「マナちゃん」(2019)でもよく使った。



・ちゃぶ台を壁に使う

小道具の意外な使い方。現場で役者が発見したらしい。これで追い込まれた感、向き合う感が出た。



・全員が猫になる

登場人物で立っている人が誰もいない。猫のよう。人間も猫も変わらない。何かを暗示するようなミザンス。



・車に乗る。

何気に置かれていた椅子が、車のセットに早変わりする。そのあと立ち上がって、すぐにマナミと海に行くシーンに早変わり。最後にマナミが駆け出すのを見つめる夫婦のシーンが残る。そのあと、夫猫が叫んで急ブレーキなど、結構展開が早く、見てしまう。



・ラーメン鍋から拳銃を出す。

犬山がノリオに拳銃を渡す。ちなみに、この劇の中で唯一過去を見ず、現実を見ているのが犬山。猫ラーメンを作る異常な人間が一番まともなことを言う逆転で面白い。



・ゴミ袋にノリオが埋め込まれている。

紀子が倒れている間にほかの3人で暗転。大量のごみ袋がこの後の伏線になる。黒ごみ袋は昭和的な家族の生活感を醸し出している。その下にノリオが隠れていて、夫婦に捨てられたことがわかる。



・ちゃぶ台に向かうノリオ

ノリオの歩み方は、「幸せな家族」の幻想に負けていく寂しい少年を象徴する。



・花火のシーン

最初の記念撮影と被るような感じのシーン。照明を絞ったことと相まって印象に残る。次の手持ち花火のシーンも、花火を上げる紀子を赤で、それを見つめるノリオを青で表現。ノリオが拳銃を撃ち、明るくなったら、散らかった部屋。目まぐるしく見た目が変わる。



・雨の中傘を持って紀子を迎えに来たノリオ

トップとSSを駆使した照明、雨音の音響と相まって、ミザンスが素晴らしい、上手の椅子がバランスをとっている。



・猫と人間の逆転

ノリオが紀子を猫にしたが、最後はノリオが猫になり紀子がそれをなでる。



・ゴミの花火と投げ合い

「生ごみ食べてでも生きていくよ。」のセリフとともに、紀子がゴミ箱に頭を突っ込んでゴミを天高く投げる。さらにこの後ゴミの投げ合い。中部大会では夫婦や犬山も入っての投げ合いで、たちまち舞台はゴミだらけに。意外なミザンス。



・ゴミの中に寝る二人

気持ちよさそうに笑いながら、ごみの中に二人が寝る。その後二人が会話を交わしてから、音楽が上がり、ノリオが紀子の首はを取る。

縛るということは、縛られていることである、という逆説がテーマとして浮かび上がる。

